

帆樫成林

—はんしゅうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.58

「帆樫成林」とは？
帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

| | |
|--|-----------------|
| 特集1 講座 「浜・潟・山の歴史と暮らし」 | P.2~3 |
| 特集2 企画展 長井雲坪 沼垂の画家うんぺいさんの里帰り | P.4 |
| 歴史さんぽ | 学校町通かいわい P.5 |
| おすすめの一冊 | 保育者の源流 赤澤ナカ P.5 |
| 特集3 | 川村修就と新潟展 P.6 |
| 館長日記 | 実り多かった館長講座 P.7 |
| 収蔵品紹介 | 仁義袋 P.7 |



長井雲坪「春園曉雨」 5月28日まで開催の企画展で展示中



春園
曉雨
帆樫

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.58

■ 帆樫成林「はんしゅうせいりん」第58号
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
■ 印刷／株式会社博進堂

各イベントは新型コロナウイルス感染症にともなう状況等により中止または内容を変更する場合があります。

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

| 日時 | タイトル | 内容 | 申込み・対象・参加費 |
|-----------------------|------------|---|-----------------------------|
| 4月30日 14:00~15:00 | かぶとを折ってみよう | もうすぐ端午の節句。大きな紙でかぶとを折ってみましょう。できあがったら、ボランテアスタッフがつくったよいろいを着て記念撮影も！ | どなたでも・申し込み不要・材料がなくなり次第終了・無料 |
| 5月3~5日 14:00~15:00 | 清少納言の知恵の板 | 江戸時代に流行したパズルゲームをつくって遊びましょう。 | どなたでも・申し込み不要・材料がなくなり次第終了・無料 |
| 5月13日 14:00~15:30 | もめん部 | 博物館にある資料を使いながら、布生産にまつわる手仕事を体験します。 | 大人向けの活動・部員が対象 |

お申し込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申し込み締切日は、当館までお問い合わせください。

現在開催中の企画展

「長井雲坪 沼垂の画家うんぺいさんの里帰り」展

長井雲坪は、幕末から明治にかけて活躍した沼垂出身の画家です。長崎で画を学んで中国へも渡り、帰国後はおもに長野を拠点に活動しました。本展では、長野で大切にされてきた一大コレクションを紹介します。

会期 2023年4月8日(土)~5月28日(日)

休館日 毎週月曜日(5月1日は開館)、5月9日(火)

観覧料 一般:500円 大学・高校生:300円 小・中学生:100円

※団体(20名以上)は2割引 ※小・中学生は土・日・祝日無料 ※本観覧券で常設展示も観覧可能

主催 新潟市歴史博物館・新潟日报社

後援 朝日新聞新潟総局、毎日新聞新潟支局、読売新聞新潟支局、日本経済新聞社新潟支局、産経新聞新潟支局、NHK新潟放送局、BSN新潟放送、NST新潟総合テレビ、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21、NCV(株)ニューメディア、FM新潟77.5、FM KENTO、ラジオチャット・エフエム新潟、エフエム角田山ほほラジオ

■ 展示解説会

日時: 4月30日(日)・5月28日(日)

午後1時30分より20分程

会場: 本館1階企画展示室

参加費: 無料(本展観覧券が必要)

申し込み: 不要

関連イベント

■ GW企画「なぞと雲坪さん」

日時: 4月29日(土祝)~5月7日(日)

開館より午後5時30分まで

受付: 本館1階企画展示室

参加費: 無料(本展観覧券が必要)

次回企画展

「現代工芸美術展」展 (主催: 一般社団法人 現代工芸美術家協会)

会期 2023年6月24日(土)~7月2日(日)

休館日 6月26日(月)

「川村修就と新潟」展

天保14年、新潟町は幕府の領地となり、「新潟奉行」が新たに設置されました。初代奉行の川村修就は在任した9年で奉行所の建設や諸制度の確立に尽力しました。当館所蔵の川村家文書を中心に、江戸末期の新潟の姿を伝える資料を展示します。

会期 2023年7月22日(土)~9月3日(日)

休館日 毎週月曜日(8月14日は開館)

みなとびあ便利

当館のホームページが新しくなりました。以前のホームページはHP作成ソフトや管理支援システムは使わず、文章入力ソフトで更新してきました。命令文を直接入力するスタッフ手作りのホームページで、たとえばトップページのカレンダーは月によって日の数が違うため、日付を表示する欄の幅はそれぞれ数値を手入力して作っていました。システムやソフトウェアに依存しない利点もあるホームページでした。

新しくなったホームページは、パソコンからだけでなく、スマートフォンやタブレット等のデバイスからアクセスしても見やすくなりました。今後も一層活用いただけるホームページ作りを心掛けてまいります。(学芸課 森)



みなとびあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。
【時間】10時~11時30分 【会場】本館2階セミナー室
【申し込み】要事前申し込み(定員60名程度) 【資料代】無料

- ◆5月の講座: 5月28日(日) ※申し込み開始: 5月10日
近世新潟町の住民 講師: 安宅俊介
- ◆6月の講座: 6月25日(日) ※申し込み開始: 6月7日
低湿地における堤防と畦畔—明治32年新飯田村堤防普請訴訟から— 講師: 山田祐紀
- ◆7月の講座: 7月23日(日) ※申し込み開始: 7月5日
富浦塚古墳史 講師: 小林隆幸
- ◆8月の講座: 8月27日(日) ※申し込み開始: 8月9日
農業用の舟 講師: 森行人

お知らせ

■ 2023年6月5日(月)から12日(月)まで薬剤燻蒸のため休館となります。

旧小澤家住宅企画展

■ 「新潟歴史玉手箱」展
会期: 4月1日(土)~5月7日(日)
開館時間: 午前9時30分~午後5時
休館日: 原則月曜日、祝日の翌日、年末年始
入館料: 一般200円
小・中学生100円(土・日・祝日は無料)

■ 「老舗料亭 行形亭の器」展
会期: 5月20日(土)~6月25日(日)
所在: 新潟市中央区大川前通12番町2733
(みなとびあから約800m、徒歩12分)
TEL: 025-222-0300

編集後記

今回は講座「浜・潟・山の歴史と暮らし」について特集しました。この講座では、市域の変遷をはじめ、タイトルにもある通り浜、潟、山という3つの視点で市域の歴史を紹介してきました。これを機に、地元の歴史を深く知ることができた方も多かったように思います。今後新潟市内の博物館・資料館と協力しながら、様々な視点で市域の歴史を紐解けるよう努力してまいります。(鈴木)

■ お問い合わせ・申込みは博物館まで

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130
E-mail: museum@nchm.jp URL: https://www.nchm.jp
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
【開館時間】(4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00

2023年度



講座「浜・潟・山の歴史とくらし」

安宅 俊介

はじめに

新潟市は平成十七(二〇〇五)年三月に新潟市・白根市・豊栄市・小須戸町・横越町・亀田町・岩室村・西川町・味方村・潟東村・月潟村・中之口村、さらに十月に巻町の十三市町村と合併しました。当市はこの大合併の後、本州日本海側では初の政令指定都市となり、その市域は従来と比べて格段に広くなりました。



現地見学会(1月15日) 北区郷土博物館



現地見学会(2月19日) 西蒲区岩室民俗史料館

や講座などの機会を通じて個別に取り上げてきました。しかし、これまでは部分的な紹介に留まり包括的な視点に欠けていました。このことは当館にとって積年の課題の一つでした。

そこで当館ではこうした状況から少しでも歩みを進めるべく、昨年度から合併後の新潟市域を「浜・潟・山」の視点で捉え直す試みを始めました。

市域の両端を越えてなお伸びる海岸と浜、河川と結びつきながら点在する大小の潟、弥彦・角田山地と新津丘陵を中心とする山。合併前の旧市町村の枠組みを越え、横断的・散在的に存在するこれら「浜・潟・山」は、現市域の大部分を占める平野と、そこに横たわる河川の存在を前提にしながら人びとの暮らしのあり方、ひいては当市の歴史に大きな影響を与えてきました。

本講座はこうした「浜・潟・山」という視点を媒介に、合併後市域の各地域のあり方を具体的に検討し、市域の歴史像を総体的に見つめ直そうという試みです。

実施概要

昨年度は本講座の初年度ということ、まずは「浜・潟・山」の歴史と暮らしの概要を掴むため、基礎的な講座四本(一本六〇分)を二日間にわたって開催

しました。その上で「浜・潟・山」の歴史の痕跡を示す資料が各地域の博物館・資料館に数多く保存されていることから、各館の方々に解説していただく現地見学会を計二日間実施しました。詳細は以下の通りです。

- 第一回 十二月四日(日)
講座① 「浜・潟・山をもつ新潟市
―市町村合併の歩み―」
- 講座② 「浜の歴史と人々のくらし」
- 第二回 十二月十八日(日)
講座③ 「潟の歴史と人々のくらし」
- 講座④ 「山の歴史と人々のくらし」
- 第三回 一月十五日(日)
見学会① 北区郷土博物館
- 見学会② 西蒲区岩室民俗史料館
- 第四回 二月十九日(日)

当初、募集人数は見学会の実施を見据え、四〇人で設定していましたが、これを大幅に超える応募があったため、コロナ禍の状況に配慮してソーシャルディスタンスを確保しながら、講座(第一回・第二回)に関しては定員を六〇人に増やし実施しました。さらに第三回・第四回の現地見学会については時間を午前・午後の二部制にした上で、別途参加の意思を確認しました。

- A3 講座のみが良い [三〇%]
- 両方開催 [七〇%]
- 見学会のみが良い [〇%]

この他、講座についての自由記述アンケートには、テーマ設定が良く分かりやすかった点、これまでとは違った視点で歴史を見ることができた点、講座の内容・資料が充実していて良かった点などの回答が寄せられました。その一方で、一つあたりの講座の時間が短くであったため、もう少し深い説明が欲しかった点、細かい事例を知りたい点などのご意見も寄せられました。次年度以降の課題です。

- Q1 見学会の企画はどうでしたか [四五%]
- A1 とても良い [五五%]
- 良い [〇%]
- 普通 [〇%]
- 悪い [〇%]
- とても悪い [〇%]

- Q2 これまで今回見学した二館を鑑見たことはありましたか [六〇%]
- A2 今回初めて見学 [三四%]
- これまで一館だけ [一六%]
- 二館とも有り [〇%]

- Q3 市内の博物館・資料館で今回のような見学会をしてみたいところはありますか(複数回答可) [三三%]
- A3 新潟市文書館 [三三%]

- 旧笹川家住宅 [一九]
- 新潟鉄道資料館 [三三]
- 新潟市文化財センター [四四]
- 弥生の丘展示館 [三三]
- 中之口先人館 [二六]
- 石油の世界館 [二五]
- 澤将監の館 [二七]
- 江南区郷土資料館 [二七]
- 巻郷土資料館 [一九]
- しろね大風と歴史の館 [二五]
- 潟東歴史民俗資料館 [二六]
- 曾我・平澤記念館 [二六]

またこの他、見学会についての自由記述アンケートには、今回のような機会が無ければ現地の博物館・資料館に行くことがなかった点、各館の方々の解説が良かった点、講座の内容と現地見学会が繋がって内容を理解することができた点などの回答が寄せられていました。

今後の展開

今回「浜・潟・山」という視点で講座を行うにあたり、改めて、市域全体の資料把握を進める重要性が浮き彫りになりました。各地の事例を比較したり、共通項を探したり、あるいは年代ごとの変遷を検討したりするためにも、より多くの資料が必要です。今後、市内の各博物館・資料館と連携しながら、市域全体の歴史像をより明瞭にしていきたいと考えています。

- (あたか しゅんすけ 学芸員)

実施結果

第一回・第二回の講座終了後、参加者にアンケートを取りました。結果は以下の通りでした(有効回答数四〇人)。

- Q1 講座の企画はどうでしたか [三〇%]
- A1 とても良い [三〇%]
- 良い [六〇%]
- 普通 [二〇%]
- 悪い [〇%]
- とても悪い [〇%]

- Q2 今後、合併地域の特徴に注目した講座にまた参加したいですか [八七・五%]
- A2 参加したい [八七・五%]
- どちらでもない [二〇%]
- 参加しない [一二・五%]

- Q3 今後、講座の開催方法はどのような形が良いですか [三三%]
- A3 新潟市文書館 [三三%]

(背景 長岡領曾根組絵図 当館蔵)

海外への渡航が禁じられていた江戸時代に、中国画を学び、中国・清への密航を果たした画家がいました。沼垂生まれの南画家、長井雲坪（ながいんぺい 一八三三～九九）です。

雲坪は、天保四（一八三三）年に沼垂に生まれ、十六歳で長崎へ赴き当地で画家として名高かった木下逸雲（きのしたいつうん）と鉄翁祖門（てつおうそもん）に師事しました。

そして慶応三（一八六七）年、雲坪三十五歳のとき、かねてから切望していた清への渡航を決行します。とはいえ国禁ですから簡単ではなく、あちこち奔走し、当時長崎官立学校で教師を務めていたアメリカの宣教師フルベッキを頼りま

した。はじめは応じてもらえなかったのですが、雲坪の熱意に打たれたのか、フルベッキは紙片に何かを記し、出島のアドラン商会へ持参するよう告げました。それによってついに上海への渡航を成し遂げたのです。船賃は十八円程だったといわれています。

上海ではまず電灯の明かりに驚いたとか。他に密航を為していた同門の画家に会い、中国の文人たちと交遊して、江南地方をめぐる旅をしました。しかし、食が合わず、持病の肝臓病も重くなり、やむをえず帰国します。これが明治元年春のこと、渡航はわずか一年足らずでした。

以上のエピソードは、雲坪の門人で最大の支援者であった柏原（現長野県

信濃町）の中村利貞がまとめた伝記

に拠るものです。それが書かれたのは雲坪が六十七歳で没した明治三十二年（一八九九）年の二年後でした。この年、利貞は雲坪の生誕地沼垂を訪ねていました。雲坪の両親は修業時代中に亡くなっており、雲坪のことを知る人はほとんどいなかったようです。

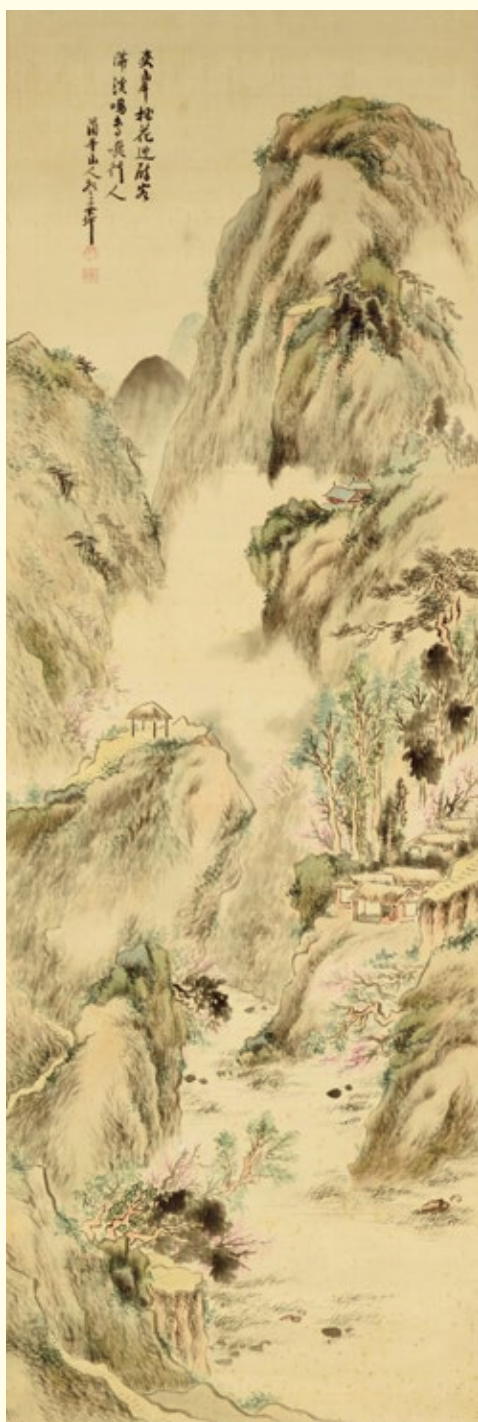
ただし雲坪は、清から帰国後東京へ出て、その際一度沼垂へ帰郷していません。東京から故郷へ便りを出す、長らく連絡のなかった雲坪はすでに死んだものとされていたといい、父母の死もそこではじめて知ります。雲坪は明治七（一八七四）年に故郷へ帰り、母の年忌法要を執り行いました。二か月ほどの滞在

期間中には絵の依頼が多くあり、現古町通七番町にあった畑新旅館などに滞在して制作に勤しみました。県令の楠本正隆からも依頼があったと、雲坪自身が手紙に記しています。

その後雲坪は東京へ戻りますが、ほどなく長野へ入り、利貞の父梅観の歓迎を受けたのを皮切りに、長野を拠点として方々で絵の依頼に応じ、善光寺裏に門人たちが用意した自宅で生涯を終えました。こうして、雲坪は長野ゆかりの画家として知られています。

この度みなどびあでは、長野県諏訪市の飯田善次郎氏（一八八四～一九六〇）の一大コレクションにより、雲坪の魅力を紹介する企画展を開催します。飯田氏はとくに雲坪作品を熱心に収集され、そのコレクションは、雲坪が清から帰国した後の明治二（一八六九）年より、没する前年までの作品一〇〇点あまりに及び、画家として独り立ちした後の活動期を網羅しています。雲坪作品で評価の高い生き生きとした猿図や、幽霊などの珍しい画題も含まれます。また「桃林山水図」は、春の季節にふさわしい色鮮やかな作品で必見です。

（なかむら さとな 学芸員）



桃林山水図

の導入が進み、明治6年、新潟町は西洋医学の普及と医学教育の場として新潟医学校を設置しました。その後、明治11年の明治天皇の北陸巡幸に合わせ、建物は2階建ての西洋建築に建て替えられました。新潟医学校と附属病院、そして官立師範学校は道を隔てて近接し、これらの学校群が並び立つ姿は壮観であったようです。明治11年に新潟を訪れたイギリスの女性旅行家イザベラ・バードはこうした様子を「近代的で大学（University）のようだ」と記録に残しています。

明治6年にはこの周辺に対して「学校」を冠する地名が付いていました。学校群は財政難により明治半ばまでに廃止されてしまいましたが、地名は残り、明治後期には商業学校、高等女学校が、すぐそばには中学校も開校し、新潟県の中等教育を象徴するエリアとなりました。

学校町は新潟町の最西端であり、ここを通る旧北国街道には三献茶屋があったことを示す石碑が設置されています。江戸時代の三献茶屋について「北国一覽写」にて、長谷川雪旦は「別れの茶屋」として、弥彦方面へ向かう際になじみとなった遊女らがここまで見送りに来たことを記しています。

江戸時代には新潟町の辺境でしたが、明治時代には新潟の近代化の象徴となるのが学校町通なのです。

藍野 かおり(あいの かおり 学芸員)



官立英語学校(左)と官立師範学校(右)

歴史さんぽ

学校町通かいわい

新潟県内ではおなじみの「学校町」という地名ですが、実は全国的には珍しく、地図製作会社の調査によると「学校町」は新潟県内にしか存在しないそうです。今回は新潟県内の「学校町」の先駆けとなった新潟市中央区学校町通の歴史を紐解きます。

学校町通は新潟地方裁判所から新潟市役所、新潟大学歯学部キャンパスを経て関屋につながる旧北国街道沿いのエリアです。現在は新潟中央高校（前身は新潟高等女学校）が存在し、またかつて新潟商業学校（新潟商業高校の前身）があり、そして近隣には新潟高校（前身は新潟中学校）があることから、この3校が名前の由来と思われるがちですが、本来の由来は、明治初期にこの地を中心に近代的な学校が建設されたことにあります。

明治5(1872)年、新潟町は白山神社の備荒蔵があった場所（現在の新潟市役所分館の場所）に新潟学校を開設しました。開港場となった新潟で英語を使える人材の養成が目的でした。その後、新潟学校は県立新潟学校となり、明治8年には洋風の校舎が建てられました。

また、明治政府は西洋文化の需要や学校教育の進展を担う人材を育成するため、全国7拠点に英語学校と師範学校を設置することとし、新潟を拠点の1つに選びました。明治7年に官立英語学校、翌8年には官立師範学校がそれぞれ砂丘のふもと（現在の新潟大学歯学部の場所）に建てられました。

さらに医学の分野でも西洋的な制度

おすすめの1冊

保育者の源流 赤澤ナカ

— 日本最初の保育所の保母 —

新潟市中央区にある赤沢保育園は、日本初の保育園とされています。それは明治時代中期、赤澤鍾美が設立した新潟静修学校に通う子どもたちが連れてくる幼い妹・弟たちを学校の別室であずかったことに始まります。こうした保育事業は鍾美が始めた一般に伝わっていますが、本書では、幼児や保護者に接し、実際に保育を担った妻ナカに焦点をあてています。そして、「赤澤ナカこそ、日本における保育者の源流」と位置付けています。

ナカが保育を始めた目的は、鍾美が行う学習の時間に幼児を静かにさせること。そのため当初は保育料をとらず、玩具や間食も与えて家族のように接していたようです。ナカは手探りで保育に当たり、後には幼稚園にも赴いて、専門の教育を受けた保母に教えるを乞うこともあったようです。ナカは常々「人様の子どもを預かっていることを忘れてはならない」と、保母に話していたとのこと。子どもたちを危険にさらさないよう常に注意することがナカの理念にあったようです。本書はナカを通じて保育の基本をも伝えてくれます。

（小林 隆幸 副館長）



伊藤充 著
2022年
ウエストン 発行

企画展 川村修就と新潟展

ながたか

(会期 二〇二三年七月二十二日〜九月三日)

田嶋 悠佑

今から一八〇年前、江戸時代末期の天保十四(一八四三)年六月に新潟町は幕府の領地となり、領地を管理するための「新潟奉行」が新たに設置されました。新潟町は長らく長岡藩が治めてきましたが、後述する「抜荷」問題が起こったことや、外国船が日本各地に出没する中で日本海沿岸の海防を強化するためなどの理由から江戸幕府は領地替えを指示したのです。

このとき、初代の新潟奉行となったのが川村修就です。修就は九年の在任期間で奉行所の建設や諸制度の確立などに尽力しました。一方で、新潟の風習に関心を寄せ「あまのてぶり」などの作品も残しています。

今回、新潟奉行設置一八〇年を機に、修就や彼の生きた時代の新潟町について紹介する企画展を開催します。

当館では、川村修就のご子孫より昭和五十一(一九七六)年以来、新潟市へ寄付していただいた貴重な史料を保存しており、これらは平成二十五(二〇一三)年に新潟県指定文化財に指定されています。

企画展ではこれらの史料を六つの章に分けて紹介します。

川村家は徳川吉宗が紀州藩主から八代将軍に就任した際、付き従って江戸

入りした幕臣でした。川村家は諸国を探索し、将軍に情報を上申する「御庭番」という特殊な役職を務めています。第一章「川村修就の登場」では甲冑、由緒書、御庭番の手続書などから川村家のルーツを紹介します。

川村修就が赴任した新潟町は江戸時代に日本海航路の船が行き交う湊町として繁栄していました。江戸時代後期になると、正規ルートを通らない密輸品である「抜荷」が国内に持ち込まれ、新潟町でも販売されました。天保六(一八三五)年と同十一年の二回にわたって抜荷が摘発され、新潟町が長岡藩領から幕府領に移管される、いわゆる「新潟上知」のきっかけとなりました。第二章「抜荷事件と新潟上知」では、抜荷関係の古文書や関係する人物たちの史料を紹介します。

新潟奉行が設置され、初代奉行となった川村修就は、奉行所の建物や組織の整備を行うとともに、新潟町の商業慣行を改めさせたり、長年の課題だった砂防について植林を進めて対策をしたりしました。また、砲台を設けた台場の設置による海防強化なども進めます。第三章「新潟奉行川村修就」では、修就への新潟奉行任命書や奉行所の絵図のほか、奉行所での裁判記録、台場絵

図や大砲模型など海防関係資料を紹介します。

川村修就は新潟町の風景や習俗などにも関心を寄せ、絵の得意な部下などに命じてその様子を描かせました。第四章「描かれた新潟」では修就の部下小尾勘五郎らが制作に携わり、新潟の盆踊りや漁業の様子を描いた「あまのてぶり」や、新潟神明宮神官に出自を持つ行田魁庵に描かせた「白梅図」など、修就ゆかりの作品を紹介します。

嘉永五(一八五二)年、川村修就は幕府の命で新潟奉行を離任し、つづいて堺奉行、長崎奉行などを歴任しました。慶応三(一八六七)年の隠居後は閑斎と名乗り、明治維新後は薬品の商売を行いました。第五章「新潟を去る」では、堺台場の絵図など修就が引き続き海防に関心を寄せたことを伝える史料や維新後の薬品商売関係史料を紹介します。

新潟町の風景や習俗などに関心を寄せた川村修就は、ほかに新潟の珍しい文物や気象などの記録を残しています。また、川村家の資料には修就が愛好した乗馬関係のものや、将軍家とのつながりを示すものも残されています。

修就は、新潟での生活を妻の「たき」や長男の修和などとともに過ごしました。次男で家督を継いだ帰元は御庭番

に就任して明治以降はその語り部となりました。帰元の子である清雄はヨーロッパで洋画を学び、日本洋画の先駆者の一人となりました。第六章「川村修就と川村家」では、新潟の気温を記録した「寒暖規則」や家紋入りの鞍など修就の様々な関心を伝える資料や、たきの和歌、清雄が父帰元の米寿を祝って描いた絵皿など、修就の家族に関する資料を紹介します。

川村修就について、みなとびあでは常設展示やミュージアムシアター、講座などでしばしば紹介しており、おなじみの方という印象もあります。今回の企画展では修就の功績や人となりを改めて紹介するとともに、これまでの展示ではなかなか紹介しきれなかった魅力も発信できればと思います。

(たじま ゆうすけ 学芸員)



川村修就肖像画(当館蔵)

実り多かった館長講座

年度末恒例の館長講座が終わりました。テーマは「みなとまち新潟の原点を探る」です。市民の多くは新潟には歴史がないといいますが、考古学が専門の私も、お城のない港町だからと安直に考えていました。その認識を改める企画でもありました。

まず第一回で私が「みなとまち新潟の歴史と現在」を概説しました。新潟は古町周辺の現在地に明暦元(一六五五)年に成立しましたが、その前に浜側の西大畑周辺にあった「古新潟町」の段階、さらにその前の「平島」(数キロ上流の西川合流点周辺)の段階があり、二回は移転しています。このうち一六世紀末前後と推定される平島から古新潟町への移転は、日本海に直結した信濃川河口への進出であり、飛躍への転機とみられます。

第二回の山上卓夫氏「新潟町・湊の成立」は、一六世紀の平島段階を中心にした考察です。多くの記録や地名をもとに、新潟津があった平島には関所があり、当時の新潟は多くの寺院や店・宿などが所在した大きな港町だったと

しました。当時の寺院や霊場の推定地なども示されました。第三回の新潟市文化財センター今井さやか氏「発掘された近世新潟町」は、新潟市が実施した考古学の成果の報告です。地下水と闘いながら、地下二〜三メートルから出土した屋敷跡や建物跡、多数の陶磁器などから復元した鋳物や漆工などの産業、人々の暮らしは生き生きとしています。

第四回の新潟大学堀健彦氏「新潟地域の市と町」は、学生たちと調査した定期市についての考察です。市内の川沿いには江戸時代から町場が発達し定期市が開かれ、合併前の役場がありました。それらは今も続いてネットワークをなし、全国的にも貴重な遺産だそうです。広大な新潟市域は河川を通じて密に交流していたのです。

現代の地方都市は一六〇〇年前後に成立した城下町が一般的です。港町の新潟も同じ頃には河川に進出し大いに発展します。それだけに新潟ならではの歴史と文化財があったのです。私はこの講座により、郷土新潟がより身近に誇らしく思えるようになりました。

収蔵品紹介

仁義袋

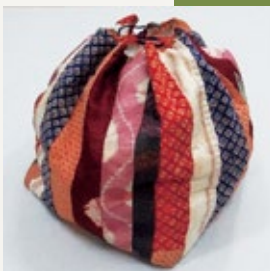
袋は、私たちのくらしの様々な場面で今なお使用され続けています。学校で使用する体操着袋や給食袋、贈答用品の紙袋、マイバッグなど、何かを包んだり、運んだりする際には欠かせない道具です。

袋と一口に言っても、その形状や素材は用途によって様々ですが、布で作られた袋に限っては、主に紐通しの形状によって分類できるとされます。例えば、袋の口部分に乳と呼ばれる紐を通しを取り付けた平面的なつくりの合財袋、袋本体に紐を通す穴がある平面的な巾着袋、底面が平らで立体的な信玄袋などに分類されます(額田巖「一九七七」ものと人間の文化史20包み)。

色とりどりの短冊形の布を縫い合わせて作られたこの仁義袋は、口部分に乳があり、底面は四角い布地で立体的に作られていることから、合財袋と信玄袋の特徴が融合したものとさえそうです。布地は複数の着物地を利用・加工したと思われ、民具の再利用例としても興味深い資料です。

また、仁義袋という名称から、葬儀などの近所づきあいの際に、米や贈答品を入れて使用したものと考えられま

す。現在、婚姻や葬送などの人生儀礼は地域を離れ、式場などで行われることがほとんどですが、かつての村落では人生儀礼の大半が村落内で行われていました。祝儀や香典も現物支給が多く、こうした品物をハレ(非日常)の場へ包み運ぶ際に、色鮮やかな袋を使用したと考えられます。こうした袋には、新潟県中頸城郡の丸袋のほか、山梨県の義理袋、高知県の桔梗袋などがあり、いずれも儀礼や近所づきあいの際に、餅や穀物、贈答品を入れるものと報告されています(上原甲子郎・五十嵐稔、一九七二「新潟県下のモジリ袋」『民具マンスリー』五巻七号)。



現代を生きる私たちは、手中のスマートフォンなどで様々な人びととコミュニケーションを取ることができず。しかし、昔前までは、実際に人びとが出会い、集うことでしか成立し得ない関係性が大半を占めていました。仁義袋は、人から人への贈り物や、それが結び維持するかつての社会関係のあり方を私たちに伝えてくれます。

(山田 祐紀 学芸員)